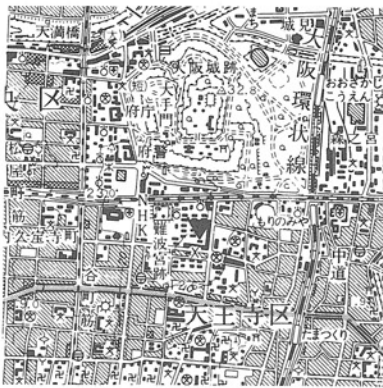


大阪・難波宮跡なにわのみや (1)

- 1 所在地 大阪市中央区法円坂一丁目
- 2 調査期間 NW〇二―一三次調査 二〇〇三年(平15)三月
- 3 発掘機関 財大阪市文化財協会
- 4 調査担当者 積山 洋・李 陽浩
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代―近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

難波宮跡は上町台地の北端、標高二〇m余の平坦地に位置する。



(大阪東北部)

ここでは二時期の宮殿遺構が同一中軸線上でみつがっている。後期難波宮が聖武朝に建設された奈良時代の宮殿であるのに対し、前期難波宮は天武朝に火災で焼失した遺構群である。近年、その建設が孝徳朝の段階とみられる発見が相次ぎ、『日本書紀』に記された「難波長柄豊碕宮」である可能性が一段と

高まっている。

一九五四年に始まった発掘調査は今年で五〇年を迎える。今回の調査は、史跡公園の東に隣接する市営住宅の敷地で、史跡の追加指定のために実施した小規模な試掘調査である。調査区は大きく南北に分かれ、計一三の大小のトレンチを掘削した。

北部の調査区では、前期難波宮朝堂院東回廊の柱穴や、後期難波宮の石敷面、瓦堆積や、時期不明の大型の柱穴多数が検出された。

南部の調査区では、下層遺構とみられる柱穴群などのほか、南東隅で旧地形の大きな落込みが検出された。この落込みでは、東西約三〇mのトレンチの西端において、地表下約五mで地山(上町層)に達したが、東端では地表下約七mまで機械掘削しても地山に到達せず、水分の多い軟弱な砂礫層が検出された。木簡は、砂礫層の一部を取り上げて洗浄した際、数千点の加工木とともにみつかった。砂礫層からは須恵器の杯皿が一点みつかり、難波の土器編年ではおおむね難波Ⅲ古段階(七世紀前葉)に位置付けられるので、この砂礫層の年代は難波宮下層段階か、少し降って前期難波宮の段階(六五一年―六八六年)と考えられる。

加工木はさまざまな大きさで、板状のものがほとんどである。両端を刃物で斜めに切断しただけで、どの面も加工されていないので、その大半はハツリ屑とみられる。ほかに部材らしき小破片もある。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・日子

・古カ

(33)×29×2 0.81

木簡は柾目材で、上下とも折損している。両面は、いずれも平滑に削って仕上げてはおらず、「日子」字のある面は凹凸が目立つ。「日子」は成年男子の美称を記したものであるが、全体の文意は明らかではない。いわゆる六朝風の書風であり、先に示した地層の年代観とも矛盾しない。このほか、細い墨線が認められる破片が数点あり、一本線が多いが、中には二重線もある。その大半が直線なので寸法を示すものかと思われるが、最長でも二四mmしか残っていないため性格は不詳である。

なお、釈読に際しては大阪市立大学の栄原永遠男氏、奈良大学の東野治之氏のご教示を得た。

9 関係文献

大阪市教育委員会・財大阪文化財協会
『平成一四年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書』(二〇〇四年)

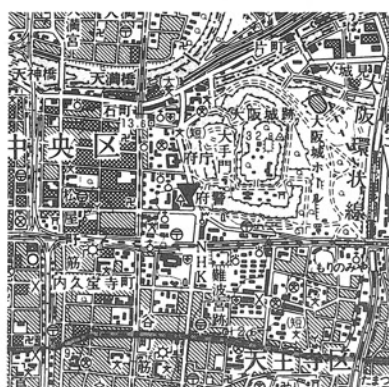
(積山 洋・古市 晃〈大阪歴史博物館〉)



赤外線写真

大阪・難波宮跡
なにわのみや
(2)

- 1 所在地 大阪府中央区大手前三丁目
- 2 調査期間 二〇〇三年(平15)六月～二〇〇四年三月
- 3 発掘機関 (財)大阪府文化財センター
- 4 調査担当者 江浦 洋・島内洋二
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 七世紀～八世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(大阪東北部)

遺跡は難波宮跡の北西に位置する。今回の調査は大阪府警察本部棟新築二期工事に伴うもので、最古の紀年銘木簡を含む古代の木簡三三点が出土した一期工事調査地(本誌第二三号)の東側に隣接する。地形的に高い南半は、豊臣大坂城に伴う堀の掘削や造成によって大きく削平されている。しかし、北半では、上部が削平されていたにもかかわらず、調査区北西と北東で